

BLMの世界的拡大から「差別」について考える

代々木ゼミナール

世界史講師 佐藤 幸夫

ツアーの添乗と世界史の見聞を広げる目的で毎年世界一周をしておりますが、西回りにしても東回りにしても、必ずアメリカを通るルートになります。となると、立ち寄る拠点は主に世界史の教科書で頻繁に登場する東海岸の街ボストン・ニューヨーク・フィラデルフィア・ワシントンが多くなります。

こうした大都市を歩いていると、日本とは全く違い、服装から肌の色や話す言葉まで多様な人々とスレ違うのは当たり前のこと。しかし、そんな環境に慣れているはずの私が、黒人の若者が5人程度かたまっているだけで、その場を避けて遠回りをしたり、速足で過ぎ去ることがあります（白人・イスパニッシュ・中国系の若者がかたまっているのも何も感じないのに）。私は黒人の友人もいますので、勿論ですが、〈黒人に対する偏見〉などは全くありません。おそらく、勝手に〈危険性〉を感じてしまい、こうした行動をとってしまっているのかと思います。

しかし、不思議なことに、黒人人口の比率の高いアトランタやニューオリンズ、もっと言えば、犯罪の多いあのブラジルの街々を歩くときには、まったくと言ってよいほど、そんなことはないのです。勿論、黒人が多すぎて諦めているのかもしれませんが、私のこうした行動が〈差別〉という問題の根底にあるような気がしてなりません。

2020年、いわゆる〈BLM (Black Lives Matter)〉という言葉・運動がアメリカを中心に世界各国を駆け巡りました。アフリカ系アメリカ人（19世紀に解放された黒人奴隷の子孫とされているアメリカ人）をはじめとする黒人に対する暴力や差別

の撤廃を訴える行動のことですが〈BLM（「黒人の命は大切」との日本語訳は現在では賛否両論あり）〉、1964年の公民権法制定によって白人も黒人も法の下に平等になって以来、特に白人警官による黒人への行き過ぎた不平等な扱い（殺人や暴力）が起こるたびに、BLMと同様の差別撤廃運動は幾度となく起きてきました。

特に今回の運動が世界的に拡大したのは、運動の内容そのものに要因があるわけではなく、SNSによる拡散がグローバル化を促したにすぎず（国によっては、アメリカの黒人差別問題を自国における格差不満にすり替えて運動化している事実が多々見受けられました）、この差別問題自体はアメリカ合衆国の歴史が持つ特異性にあり、アメリカ社会の根底にある〈歪み〉からきているモノと私は考えています。しかも、これは〈国家分断〉とも表現されていますが、ただの〈白人×黒人〉という構図ではなく、〈今までの生きてきた人生観〉〈施されてきた教育〉〈現在の立場や利害などの外部環境〉などの複雑な要因が絡み合っていると思われます。となると、そのアメリカ合衆国の特異的な〈歪み〉を〈黒人の歴史〉から追って見る必要があるでしょう。

17世紀からイギリス本国の政治や社会に不満を持った人々が新しい生活を求めて、アメリカ大陸への移民を開始しました。1732年までに13の植民地を形成しましたが、成立当初から北部と南部の植民地の様子は多くの面で異なっていました。1620年のピルグリム＝ファーザーズによるプリマス上陸以来、北部の植民地人は自主独立の精神が強かったため、常に本国による重商主義政策と対

立してきました。一方、南部の植民地人は本国の支援のもとに作られた植民地もあり、またプランテーション（大農園）農業で栽培されたものを本国に買い取ってもらう経済構造にあったため、少なからず本国への従属的影響を受けざるを得ませんでした。労働力として、西アフリカからブラジルやカリブ海を経由して入ってきた黒人奴隷を使うことでコストを下げねばいけないのも、生産物価格を安く抑える必要があったからです。よって、南部の植民地人に〈本国が上〉で〈植民地は下〉という劣等感が生まれてきたのです。「俺たちは本国の奴隷じゃない」という心の叫びは北部植民地人とは違い、表に出せなかったことで、「俺たちは奴隷を使っているんだ！だから奴隷ではない」という自らの存在よりも下に位置する存在を作り、差別化をすることで、アイデンティティを保とうとしました。これが南部の白人が〈黒人奴隷〉に根強い差別感を持つようになった精神的な背景になったのです（現代社会にも良くあることです）。

こうした本国との関係の違いは、1774年の第1回大陸会議（独立戦争を決意した各植民地代表が集まった会議）に最南端のジョージア植民地が参加しなかったことや〈忠誠派〉と呼ばれる独立反対派が全体の3分の1、消極的な〈中立派〉が3分の1もいたことなどからも、もともと13植民地自体が一枚岩ではなかったことがわかります。

1776年に『独立宣言』を起草したジェファソン（独立メンバーの中では際立って若かったので、他の指導者よりも正義感という面では熱い思いはあったようです…ヴァージニアに残るジェファソンの自宅でのガイドの解説より）は地主の家柄で奴隷も使用していたにも関わらず、当初、この宣言に〈奴隷廃止〉を書き入れましたが、重鎮の反対により消し取られています。

また、1887年に制定された合衆国憲法にも平等に暮らす権利がありますが、これにも先住民や黒人は含まれていませんでした。勿論、ワシントンなどの南部ヴァージニア出身の政治家が多かったこともありましたが、国家をしっかりと統合して

いくためには、発言力を持つ南部の地主たちの協力は不可欠であったと考えられていて、妥協の産物だったとされています。

世界史の授業で、南北対立表を解説する際の〈奴隷〉に関する説明にて、「北部は人道主義の立場から奴隷反対」と教えますが、その本心にも、南部人口の3分の1（早稲田大学入試に出題されました）にもなる黒人奴隷が解放されれば、当然北部に移動し安価な工場労働者として雇用できるという北部資本家たちの企みもあったわけで、北部の人間が、純粋に〈奴隷差別〉に反対していたとは思えない状態だったことは理解できます。

加えれば、南北戦争を勝利に導いたリンカン大統領であっても、もともとは奴隷反対派（彼は南部のケンタッキー州出身）というより保護貿易派であることの方が有名でした。1863年に発布された〈奴隷解放宣言〉も歴史的には素晴らしいものではありませんが、真の狙いは、南部に加担するイギリスの〈奴隷を廃止している国が奴隷を支持する南部を支援している理不尽さ〉を表面化させ、北部支援に変えさせることでした。これまた、よじれた見方にはなってしまいますが、心から〈奴隷差別〉をなくすことが目的になっていたと言いたい歴史になっているのです。

そして、南北戦争後は、北部が南部を監視する形（再建法）で奴隷解放が進められましたが、市民権・投票権においては、まもなく剥奪されてしまいます。勿論、これには〈黒人が白人と平等になっては困る〉南部地主の意向が強くあり、これが、かの有名な黒人隔離法〈ジム＝クロウ法：黒人が白人の使用する公共施設の使用を禁止する〉の制定の基盤となっていったのです。この法律は、州政府レベルで発布された差別的な法律の総称ではありますが、後々、この法は先住民や黄色人種など非白人すべてに適用されたことも重要です。

1920年代の孤立主義外交の復活によりアメリカ社会が排他主義へ傾くと、一時下火になっていたKKK（1865年の奴隷解放に合わせて南部のテネシー州で結成された白人至上主義団体）による黒人迫害は再燃しています。

結局、19世紀末に失った市民権・投票（参政）権を黒人が奪い返すのに約100年の時を要しました。1954年に起こった〈ブラウン判決：白人学校への転入を拒まれた黒人生徒の父が教育委員会を提訴し、最高裁で黒人・白人の別学は違法であるとされた判決〉で公民権運動に火が付き、55年のバス＝ボイコット運動でキング牧師の名が全土に広がりました。そして、リンカンによる奴隷解放宣言100周年となる1963年、キング牧師はワシントンにあるリンカン記念堂への大行進を行い、20万人の黒人を目の前にして、あの有名な“I have a dream！”の演説をすることとなったのです。ケネディ大統領暗殺で副大統領から大統領に就任したジョンソンは1964年に公民権法を制定し、黒人の法の下での平等が憲法に追加され、市民権・参政権を獲得するに至りました。

しかし、それはあくまでも法律上の平等にすぎず、ベトナム戦争の戦場での扱い、雇用形態や社会的地位においては、依然と黒人差別は残り、1968年にはベトナム反戦運動と黒人差別反対運動が合体し、大規模な反政府運動へと発展していったのです。

なぜ、アメリカにはそこまで〈黒人と白人の平等〉〈黒人の存在自体〉を嫌う白人がいるのでしょうか？

犯罪率の高さをあげる人もいますが、これは差別により黒人に貧困層の多いことで犯罪が生まれやすい環境にあるためで、つまり、犯罪者が多いから差別されるのではなく、差別による貧困があるから犯罪が生まれることは周知の事実。では、何が根底にあるのでしょうか？

それが〈恐怖〉なのです。19世紀にも黒人奴隷の蜂起で白人地主が殺された事例は少なくありません。多数に対して少数が戦いを挑むときにテロ的な行動に出ることは歴史的にも証明されています。また黒人の出生率の高さや黒人のDNA（遺伝）の強さ（両親の一方が黒人であると子供の肌の色が黒くなる率が非常に高い、ムラートやサンボの肌の色が黒い）により、黒人人口が白人

人口を上回る可能性は少なくありません。この〈危機感〉が〈差別〉の根底にあるのです。きっと本人たちは認めないでしょうけど…。

しかし、節度を越えた白人警官による暴行行為が起こることのもう一つの要因には、合衆国が持つ特異的な人種構成にあるでしょう。人種のるつぼ（人種のサラダボール）が維持できたのは、多くの人間が人種に対して〈寛容〉だからではなく、それぞれの人種がテリトリーを作り、互いにそれを侵さないというルールのもとに成り立ってきたからでした。生活圏を広げるための先住民強制移住法（1830年）、経済的に力を持ち出した中国人を追い出す華人排斥法（1882年：第一次移民法）、WASPの台頭で移民を排除した移民法（1924年：白人移民は制限、アジア移民は禁止）などで分かるように、常に白人は自らのテリトリーを犯そうとするモノを排除してきた歴史があります。法律では決して縛ることのできない〈恐怖心〉によって、こうした行動が継続され、今に残っているわけです。さらに、大統領選挙となれば、そうした白人層を支持基盤に持つ共和党はこの恐怖心をあおるわけで、だからこそ、黒人問題が表面化するタイミングの多くが共和党政権下であることも事実なのです。

以上のことから、繰り返しになりますが、このBLMは合衆国の持つ特異的な行動であって、ただ差別されている黒人が可哀そうだからと後押しする世界的行動は履き違えている点が多いと感じています。150年も前の南軍指導者リー将軍の銅像を倒したり、奴隷を運ぶきっかけを作ったコロンブスの像を倒してみたりと…世界史の断片しか見ていない行動…。もしこれらが真の差別撤廃の行動と言うならば、世界にあるアリストテレスの書物は焚書されるべきであり、Slaveの語源となっている〈スラヴ人〉の言葉は教科書から消えるべきだし、アフリカ分割を勧めたすべての政治家の肖像画は破り捨てられることになるでしょう。

話を黒人問題から〈差別〉の話に戻しましょう。2度目にインドへ行った時の話です。旅先で貧しい子供にお菓子をあげると喜ぶことを覚えた私は、ウダイプルという街を訪れる際に、チョコお徳用袋を持っていきました。ある公園で子供たちにチョコを配っている時、兄弟かなと思われる子供たちが寄ってきたので袋ごと（20個入りくらい）あげました。子供たちが木陰にいる母親らしき人にその袋を渡したのを見た私は、お礼を言ってもらいたいわけでもなく、その女性に近付いていったら、怖い顔をして大声で怒鳴りながら、私があげた袋を投げつけてきたのです。突然のことで…、とっさに私もカットになって、罵声を浴びせてその場を去ったことを今でも鮮明に覚えています。そして、帰国後、その出来事を私よりもインドに詳しい友人に話をしたら、「お前は世界史の講師、辞めた方がいいよ」と言われたのです…。その時は意味が分からず…よくよく話を聞くと…。カースト制度（ジャーティ）はヒンドゥー教徒が選んだ社会構造であり、勿論憲法違反ではありますが、社会生活には根付いてしまっていて、なくすことができないモノ。普段から手に入れることができない〈おいしいお菓子〉を子供が食べた場合、普段から食べているモノをおいしくないモノと感じ不満に思うようになる。一生、外の世界に出ることもない人間には酷なことであり、母親は本気で嫌がっていたのだと。若気の至りか…〈差別〉〈貧困〉に一矢をとという薄っぺらで勝手な〈正義感〉でした。

それぞれの国・地域には事情があります。〈差別〉の背景には〈憎しみ（Hate）〉や〈防衛（Defense）〉があり、〈歴史の歪み〉から生まれていて、〈1948年：世界人権宣言〉で謳われたような美談だけでは解決できるものでないでしょう。それを見ることなく、知ることなく、〈可哀そうだから助ける〉〈貧しいから施す〉〈差別されているから守ってあげる〉は、金持ちや余裕のある人間のエゴ的行動ではないかということの旅の中で思い知らされてきました。勿論、無関心を装えというわけではありませんが、踏み込みたいならば、

その歴史的な背景を学ぶこと、また自分が関わる身近なことから始めることのように思えてなりません。

〈差別〉という言葉から受けるイメージはさまざまです。〈差別〉をすることで競争心を持って成長する人もいます。〈差別〉されることで対抗心を持ち強くなる人もいます。〈差別〉はどんな人間の心にも多少は存在するもので、無くすことは難しい感情だと思います。

また今回の事件を受けてアメリカ合衆国に比べ〈日本人は差別の少ない寛容な国民〉だと思った人もいるでしょう。はたしてそうでしょうか。

本稿では、BLMの運動の元となっている〈差別〉を理解するためにアメリカ合衆国に特異的な〈歪み〉を〈黒人の歴史〉から追ってきました。歴史的な背景を学ぶことで〈差別〉という言葉の多様性を考えてほしいと思います。

最後に

世界にはマイノリティとして〈差別〉〈迫害〉されている人種・民族や宗教や性などがたくさんあり、その背景は千差万別です。これらの歴史的背景を学ぶことで、自分の周囲にある〈差別〉に類似するところを発見することがあります。30年間、世界を回り続け、世界史を教えているうちに、〈冷静な判断〉〈偏らない中庸〉の基盤に〈世界史〉という教科があるように思えてきました。たとえば、高校の授業で〈世界史〉という教科を学ぶチャンスがなくとも、すべての若者にいつかは触れて欲しい科目であると強くその重要性を感じています。

付記）ガンディー（インド独立の父）・サダト（中東和平を実現させたエジプト大統領）・ラビン（パレスティナ難民との和平を実現させたイスラエル首相）に共通することは〈寛容〉でした。しかし、3人とも味方の〈非寛容〉な保守派によって暗殺されています。いまだ、〈寛容〉が自己主張の強い〈非寛容〉に勝てないという悲しい現実も知っておかねばいけないのかもしれないかもしれません。